

訳鍵		
K012-50, K080-7		藤林泰助編
蘭和辞典。『ハルマ和解』の縮抄版。		

- ◆ 正式名称は『Nederduitsche TALL. 訳鍵』。稲村三泊（『ハルマ和解』の編者）の京都における門人藤林普山（泰助）（1781－1836）が『ハルマ和解』の収録語約6万語から約2万7千語を選び再編した蘭和辞典。文化7年(1810)初版発行。乾坤2巻に『凡例・附録』を含めて全3巻として刊行された。『ハルマ和解』の刊本がわずか30部であったのに対し『訳鍵』は100部刊行され、さらに文政7年(1824)には、藤林の門人である中沢権之助によって再版100部が刊行された。

本書は縮抄版とはいえ、底本の『ハルマ和解』から単純に単語を抜粋してつくられたものではない。藤林は『ハルマ和解』の不備を改良するために、単語や訳語の選択に十分な注意をはらい、改編を進めていった。その結果、本書は有効な蘭和辞典として、幕末まで多くの蘭学者に用いられたようである。

- ◆ 当館は本書を2部所蔵（いずれも本文2巻が1冊に綴じられている）している。

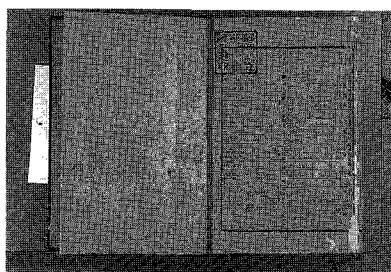
「K012-50」は厚手のハードカバーをもつ洋風の仕立てで、背表紙には「譯鍵」、扉には「譯鍵 藤林普山著」といずれも朱書きされている。題簽は失われている。

「K080-7」は通常の和綴じ本である。題簽に「譯鍵」とある。第1丁目に「浜松瞬養学校印」（浜松瞬養学校は明治8年に開校した速成教員養成の師範学校。翌9年、静岡県師範浜松支校となる）の印記がある。

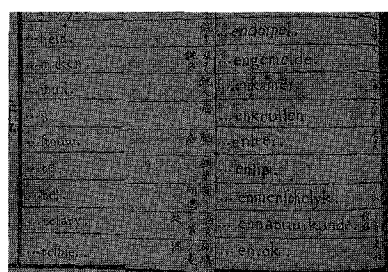
これら2部とも、本文294丁に加え、西洋産の薬品名をアルファベット順に排列した語彙集33丁（2686語）が付いているという構成は同じである。しかし、語彙集が「K012-50」では本文の前に、「K080-7」では本文の後に付いている点が異なっている。「凡例・附録」はともにない。いずれも『Nederduitsche TALL. 訳鍵』の標題は確認できない。刊記等もなく、初版本か再版本かも不明である。

影印本として『譯鍵 附蘭学逕』（849-16）がある。これは、国立国会図書館所蔵の『譯鍵』を復刻したもので、「凡例・附録」の部分も付いている完全なものである。これを見ると、「凡例・附録」は簡単なオランダ語入門書であることがわかる。

<参考文献> 『江戸時代蘭語学の成立とその展開 Ⅲ』（849-2）



4 訳 鍵



4 訳 鍵